

# Dhammapada-atthakathā にみられる Udena 王物語

田 辺 和 子

## 〔I〕 構 成

Dhammapada-atthakathā (以後 Dh. A と略) の中には, vol. I に, Udena-vatthu として 52 頁<sup>1)</sup>の長さにわたって, Udena 王の誕生, 三人の王妃を得る因縁物語, そしてそれに関わる人々の物語等がつぶさに描かれている。これを大きく分けると七つの部分に分けることができる<sup>2)</sup>。それは表 1 に示す通りである。

## 〔II〕 Dhammapada-atthakathā にみられる Udena 王婦伝に関する相当諸経の比較対照

Dh. A にみられる Udena 王婦伝の物語の部分は, 〔I〕の構成表 1 で述べた, v) と vi) vii) の部分に相当する。この部分を具体的に五つに分けて表したのが, 表 2 の〔物語〕の部分である<sup>15)</sup>。ここには, 五つの区分をしてあるが, 実際は, 3 つの物語を組み合わせて作られたのが, v) と vi), vii) の部分を合わせた Udena 王婦伝の物語である。3 つの物語とは, 前述の様に v) の部分, Sutta Nipāta や、『義足経』にみられる Māgandiya バラモンが娘を仏と結婚させようとした物語, vi) の部分は、『優填王経』や『大宝積経』『第 97 優陀延王会』第 29 等にみられる様に, 慈心三昧に入っている Sāmāvati を毒矢も当たることが出来ず, 戻ら, という物語, vii) の部分, 『Udāna』などにみられる, Sāmāvati 焼死のできごとという三物語の合成であるといえる。

そして, 3 世紀初頭に訳出された『中本起経』には, v) の部分の物語を除く vi) vii) の物語が存すること, 3 世紀末に訳出された『優填王経』には, v) と vi) の物語が伝えられていること, そして 5 世紀後半に編纂された Dh. A や 8 世紀初頭に訳出された『根本有部毘奈耶』には, v)・vi)・vii) のすべての物語がそろっていることから時代を追って物語が完成され増広されていった推移が知られる<sup>15)</sup>。

(a) Divyāvadāna の成立年代についての一考察

『中本起経』該容品<sup>15)</sup>は、3世紀初頭に訳出されているが、その中に既に、Māgandiyā パラモンが娘を仏と結婚させようとする第一の物語を除いた、全ての story が伝えられているのだから、この頃には、Udena 王をめぐる二王後の葛藤の物語の骨子は成立していたと思う。しかし、この時点では、王后、パラモンの名前は、まだ、Dhp. A や Divyāvadāna と合致しない<sup>15)</sup>。

次に、3世紀末に訳出されている『優填王経』<sup>15)</sup>には、第一の物語が、父の名摩回提と娘無比 (=Anupamā) の名をともなつて付加されている<sup>15)</sup>。従つてこの頃には、一方の王妃は、パラモン Māgandiyā の娘で無比 (=Anupamā) という名であるとされるようになっていたと思う。しかし、まだ、もう一方の王妃 Sāmāvati の名は出て来ない<sup>15)</sup>。

しかし、5世紀初頭に訳出されている『十誦律』<sup>15)</sup>の中には、Sāmāvati の焼殺の記事のみであるが、優填王、舎摩婆提、阿奴跋摩、摩健提婆羅門の4人の登場人物の名前が、Divyāvadāna に登場する名前と相応して伝えられている<sup>15)</sup>。二王妃の葛藤も又伝えている。このことから、この頃には、Māgandiyā パラモンと娘無比の物語、二王後の葛藤、Sāmāvati の焼死という物語が結びついて成立していたと知ることが出来ると思う。従つて、Divyāvadāna に述べられる物語はこの頃までには成立していたと考えることが出来る。3世紀初めに訳出された『中本起経』、3世紀末が訳出の『優填王経』の成立の頃か後と思われるから、Divyāvadāna 中のこの物語の成立は、3世紀頃から4世紀頃までに、登場する人物の名前も含めて成立していたと思う。

又、8世紀初めに義浄によつて漢訳された『根本有部毘奈耶』に伝えられているこの物語は、Divyāvadāna と、詩句の部分<sup>20)</sup>及び無比がはかりごとをめぐらして鄢陀延王に譚言する部分に於いて、非常によく合致している。しかし、登場人物の名前が少し異なる。

(b) 日本文学『今昔物語集』との関係

物語 vi)、即ち、「Māgandiyā の譚言によつて Udena 王がいかり、Sāmāvati を毒矢で射殺しようとするのだが、Sāmāvati が慈心三昧に入ったので、毒矢は Sāmāvati を射ることが出来ず、かえつて戻つて来て、Udena 王の胸前で止まつて落ちた」という物語は、「慈心三昧が威力をもつ」という説が盛んに行われた部派仏教の頃に、おそらく成立し、Udena 王伝説の中に組み入れられるようになったのであろうと思われる<sup>21)</sup>。この点については、さらに研究をすすめてゆき

表 1 Dhammapada-atthakathā にみられる Udena 王物語と他の伝承との対照関係表

Dhammapada-atthakathā (Udena-vatthu)	南方所伝中 のもの	Divyāvadāna	『根本有部 毘奈耶』	漢	訳	インド文学	日本文学	その他
(i) Udena 王の誕生	Majjhima <sup>9)</sup> Nikāya atthakathā					Kathāsarit- sāgāra IX Udayana-C <sup>9)</sup>		
(ii) Ghosaka の物語	Aṅguttara- Nikāya atthakathā		c. f. 卷 46 <sup>9)</sup> (大正 23, p. 883)					
(iii) Sāmāvati の物語			c. f. 卷 46 <sup>10)</sup> (大正 23, p. 880)					チベット訳カン ジュル目録 <sup>6)</sup>
(iv) Udena と Vasuladattā	Majjhima-N atthakathā					Kathāsarit- sāgāra XI ~ XIV, <sup>9)</sup> その他 <sup>10)</sup>		チベット訳カン ジュル <sup>9)</sup>
(v) パラモン māgandīya と娘の物語	cf. Sn, IV atthaka- vagga	36, Mākaṇḍika Avadāna <sup>10)</sup>	卷 47 <sup>10)</sup> (大正 23, p. 886)		『義足経』摩因提女経 大正 4, p. 180a 『仏説慶填王経』 <sup>10)</sup> 『增一阿含』(大正 2, p. 769)			梵本 Artha vargyasūtra <sup>10)</sup>
(vi) Māgandīyā と Sāmāvati との葛藤 Udena 王帰仏	Visuddhi <sup>10)</sup> maggā Vol. 1, p. 381	36, Mākaṇḍika <sup>10)</sup> Avadāna	卷 47 <sup>10)</sup> (大正 23, p. 703)		『中本起経』本起該容品 <sup>10)</sup> 『仏説慶填王経』 <sup>10)</sup> 『大宝積経』優陀延王会 『法句譬喻经』 <sup>10)</sup> 『大乘日子王問经』 <sup>10)</sup>		今昔物 語集 <sup>10)</sup>	
(vii) Sāmāvati の焼死	Udāna VII 10 <sup>10)</sup>	36, Mākaṇḍika Avadāna	卷 47		『中本起経』 <sup>10)</sup> 『十誦律』第 18 <sup>10)</sup>			

表 2 Dhammapada-atthakathā にみられる Udena 王帰仏に関する対照表

〔登場人物名〕	Dhammapada-atthakathā Udena-vatthu (A. D. 5 C 末後)	Divyāvadāna 36 Mākaṇḍika Avadāna	『本起義足録』『仏説優 填王経』後泰弗若 多羅譯 (A. D. 290 -306) 大正 12, pp 70- 71 大正 180a p. 157b	『本起義足録』『大寶積 経』第 18 卷第 29 会第 29 音提流志 703 (A. D. 713 大正 23, p. 543a 大正 23, p. 125)	『根本有奈 子王所問 天記』(A. D. 973 -1014) 大正 12 p. 72b	その他	
	王名	Udayana	優填王 拘深国	優陀延王 拘絺弥国	日子王 橋閃弥	雜阿含, 婆蹉	
	第 1 王妃	Vatsarāḷā	拘藍尼国	舍弥弥国	紺容	舍摩縛底	
	第 2 王妃	Sāmāvati	該容	舍弥婆提	紺容	無比	意 (増一阿含)
	第 2 王妃 の父 の妻	Māgandiyā Brahmaṇa	照堂 吉星 覓志	阿奴跋摩 摩提提 梵志	無比 摩回提 越心	無比 無憂 婆羅門	婆 羅門 (増一)
妻	Māgandiyā	度勝	母	妻	舍利 曲背		
召使	Khujujittarā						
〔物語 (v), (vi), (vii) の部分〕	(v)	有	無	有	無	無	Māgandiyā の名, Sn, 増 一阿含に (有)
	(vi)	無	有	無	無	有	Visuddhi-ma- gga (有), 法 句警諭に (有) 今昔物語 (有) 法句警諭 (有)
	(vii)	有	有	無	有	有	Ud. に Samā- vati 焼死の記 事 (有)
	(vii)	有	有	有	有	有	『今昔物語集』
	(vii)	有	有	有	有	有	王の勸に背い て仏の所に詣 った為
〔物語理由〕	Dhammapada-atthakathā	Divy	『優填王経』 (法苑珠林に同)	『大寶積経』 優陀延会 奈耶	『根本有部毘 舍耶』	『大乗日子王 所問経』	
	A. 王の怒る理由	第一王妃が毒叱 をしかけたと譚 す、仏の為に した	持斎をしてい 呼ばれては鳥料理 を、第一王妃の 譚言によって、 せよとの非法を とての訴えから。 せよとの訴えした との訴えから。	如來等が大夫人 の非法を説法した との訴えから。	Divy に同じ	沙門と姪欲を 行つたとの訴 えによって、	

(iv) の内	王に対して自己を思ふのと同じ心をもつ。 (慈心三昧)	一心帰仏	一意に仏の慈心夫人、王を哀愍を念じ、長跪に入る	慈定に入る (Divy に同じ)	慈心定に入る	(金剛經迹の我を濟い給う)
(3)	やうて来た道を戻りて王の胸前で止まる。	箭は選りて己(王)に向かう	箭は皆、后を繞りて、三匝して止まり、王前で止まる。	Divy に同じ	箭は上空の中、火焔を乘せて戻りて止まる。	一つは虚空に昇り、一つは后を三度めぐりて落ち、一つは返りて猛火となる
(4) の部分	第一王妃の前に王は怖れて、天女か、夜叉女か、ガンの娘か、ナルプアか、ンナリーカ	箭は選りて己(王)に向かう	箭は選りて己(王)に向かう	驚いて、「汝は天女か、夜叉女か、鬼女か、羅刹女か、罽駄婆女か」	箭は上空の中、火焔を乘せて戻りて止まる。	一つは虚空に昇り、一つは后を三度めぐりて落ち、一つは返りて猛火となる
の対照妻)	第一王妃の前に王は怖れて、天女か、夜叉女か、ガンの娘か、ナルプアか、ンナリーカ	箭は選りて己(王)に向かう	箭は選りて己(王)に向かう	驚いて、「汝は天女か、夜叉女か、鬼女か、羅刹女か、罽駄婆女か」	箭は上空の中、火焔を乘せて戻りて止まる。	一つは虚空に昇り、一つは后を三度めぐりて落ち、一つは返りて猛火となる

表 3 物語 (v) にみられる詩について、他の承伝との対照表

Divyāvadāna XXXVI. pp. 516~520	『根本有部毘奈耶』卷 47 大正 23, p. 886b~c	Dhammapada-atthakathā vol. I, Udena-vatthu p. 201~202	Artha-vargiyasūtra fragment III	その他
Raktasya śayyā bhavati vikopitā dviṣṭasya śayyā sahasā nipīditā	染欲人臥多穿穴 瞋者臥処草敷堅	染欲人臥多穿穴 瞋者臥処草敷堅	1, 5. raktasya hi svād avakrīṣṭasayyā mūdhāsya śayyā sabas (ā-nupī)	『義足經』摩因提經と『仏說優曇王經』に相当偈あり
1. mūdhasya śayyā khalu pādato gatā suvitarāgeṇa misevitā nviyam	愚癡人臥草綻横 此是離欲人眠処	愚癡人臥草綻横 此是離欲人眠処	1, 2. °(drīṣm) padam Atha bhaga(vā)n utkāsanasabdām <sup>4</sup> ak (ā)ṛṣid a(tha)Māgandikā°	『義足經』摩因提經と『仏說優曇王經』に相当偈あり
Raktasya puṁsaḥ padam utpātaṁ svānnpīḍitāṁ dveṣavataḥ padam ca   padam himūdhasya viṣṭīstadeham suvitarāgeṇa padam tv ih-ēdīśam	染欲之人跡不正 急性多瞋踏地堅 愚癡者跡不分明 此是離欲人行処	染欲之人跡不正 急性多瞋踏地堅 愚癡者跡不分明 此是離欲人行処	1, 3. [ve]   āyām gā-thām bhāsa (te sma)    Raktō (naro bhavati) hi mūḍho naro hi bhavati samāku-lasvaro Buddho hy ayam brā-hmaṇadundubhisvaraḥ	『義足經』摩因提經と『仏說優曇王經』に相当偈あり
Rakto naro bhavati hi gadgada-svaro dviṣṭo naro bhavati hi khakkhaṭṭasvaraḥ   mūḍho naro hi bhavati samāku-lasvaro Buddho hy ayam brā-hmaṇadundubhisvaraḥ	愚癡者跡不分明 此是離欲人行処	愚癡者跡不分明 此是離欲人行処	1, 3. [ve]   āyām gā-thām bhāsa (te sma)    Raktō (naro bhavati) hi mūḍho naro bhavati samāku-lasvaro Buddho hy ayam brā-hmaṇadundubhisvaraḥ	『義足經』摩因提經と『仏說優曇王經』に相当偈あり

<p>Rakto naro bhavati hi cañcalē- kṣano dviṣṭo bhujagaghoraviṣo yathēkṣate   4. mūḍho naraḥ santamasiva paśy- ati dviṣṭa vitarāgo yugamātra- darśi   </p> <p>Yathāśya netre ca yathāvaloki- taṃ yathāśya kāle sthita eva- gacchataḥ    5. yathāivapadmamīmītejale 'sya netraṃ viśiṣṭe vadane vīrāja- te   </p>					
<p>Dṛṣṭā mayā Mārasutā hi vipra- tṛṣṇā na me nāpi tathā ratīś ca   6. chando na me kāmaguṇeṣu kaś- cit tasmād imāṃ mūrapurīsa- pūrpāṃ    Prastuṃ hi yattāṃ api nōtsaheyam  </p> <p>Sutāmimāṃ paśyasi kiṃ madi- yāṃ hināginīm rūpaguṇair viyuktāṃ   7. chandaṃ na venātra karōṣi cār- auviktabhāveṣv iva kāma- hogi   </p> <p>Yasmād ihārthī viṣayeṣu mūḍhaḥ sa prārthayed vipra sutāṃ ta- vēnmām   rūpōpapannāṃ viṣayeṣu śaktāṃ avitārāgo 'tra janaḥ pramūḍh- aḥ    Ahaṃ tu Buddho munisattamaḥ kṛtī prāptā mayā bodhir anu- ttarā śivā   8. padmaṃ yathā vārikanair ali- ptam carāmi loke 'nupalipta eva    Nilāmbujāṃ kardamavārimadh- ye yathā ca poñkena vanō pa- liptam   tathā hy ahaṃ brāhmana loka- madhye carāmi kāmesu vivi- ktaḥ   </p>		<p>魔王奉三女 瓔珞盛莊嚴 況此卑賤身 令我足指近</p> <p>端正世無雙 我不生欲意 不淨遍充滿 亦無如是事</p>	<p>我女容華盛 仁今何所為</p> <p>端嚴無与比 無心相愛念</p>	<p>世間愚癡人 若覩斯美女 我是第七佻 如蓮出水巾</p> <p>於境生象著 遂使心迷倒 獲得無上果 不被欲塵污</p>	

たいと思う。

この物語が、登場人物の名前は一切引用されていないが、『今昔物語集』天竺篇<sup>17)</sup>に取り上げられている。表2がこれである。矢の様子の描写をみると、『今昔物語集』では「一つは虚空に昇り、一つは后を三度めぐりて落ち、一つは返りて猛火と成りて焼く」とある。これは、『優填王経』、『大宝積経』、『大乘日子王所問経』の三経の描写を全て述べていることを知る。又、王が驚いた時に発したことばは、Divyāvādāna にも相当するが、『大宝積経』優陀延王会<sup>15)</sup>に合致している。

- 1) “Dhammapada-atthakathā”, ed by Norman, vol I, published for the Pali Text Society 1970 pp. 162~231.
- 2) Harvard Oriental Series vol. 28. Buddhist Legends translated from the Original Pali Text of the Dhammapada commentary by Eugene Watson Burlingame, Introduction, pp. 1~69 参照。  
ここでは、漢訳についての言及がないので著者は漢訳の諸本で、関係のあるもの、対照せられるもの及び『今昔物語集』等日本の文学書をも参照した。表1参照。
- 3) 上述の Harvard Oriental Series vol. 28, p. 62 参照。
- 4) Kathāsaritsāgara IX, Dh. A の筋書とは大体一致するが、①涌の中に、丁度血を満たしたように臍脂などの赤色の液を入れて沐浴している王妃を生肉と思ってガルダ鳥が奪い去る。とある。②聖仙の前で生まれる。③蛇王ヴァスネーミを助けたので、ヴィナーと花環の作り方と永久に消えない印をつける技術を受ける（これが象をならす方法となる。）④蛇王を助けるために、蛇王を生け捕りにした獵師に自分の腕輪を与える。これが発見のきっかけ。⑤父王は死なず、母后は父王の元に戻る。⑥母は聖仙とは結ばれない、是の如き違いがある。
- 5) 『根本有部毘奈耶』卷46, 大正23, p. 883 妙音長者前生物語である、妙音と呼ばれるに至った因縁が共通している。
- 6) Eugen Watson 前掲書 p. 62 参照。
- 7) 『根本有部毘奈耶』大正23, p. 880。「世羅苾芻尼が勝音城より除患大臣の女紺容を妙音長者に付与して養育せしめた」とある。
- 8) Kathāsaritsāgara XI~XIV, 大体筋書は Dh. A に同じ。しかし Dh. A では、初めは Caṇḍapajjota 王が恋愛感情を二人に抱かせないように、互いに姿を見せない様にして象呪を娘に会得させようとしたのに対して、Kathāsaritsāgara でははじめから結婚させようという意図を持っている。Vinā を学ばせようとする。
- 9) Eugene Watson 前掲書 p. 63 参照。
- 10) 岩本裕「カターサリットサーガラウダヤナ王行状記」岩波文庫解題, p. 203 参照。
- 11) The Divyāvādāna, by Edward B. Cowell & Robert A. Neil, 1970 Paris XXXVI, Māṅḍikāvādānaṃ pp. 515~544.
- 12) 『仏説優填王経』大正12, pp. 70~71.

(78) Dhammapada-atthakathā にみられる Udena 王物語 (田 辺)

- 13) この部分に於ける Divyāvādāna と『根本有部毘奈耶』の偈文の対照表は表3参照。
- 14) The Sutta Nipāta in a Sanskrit Version from eastern Turkestan, by A. F. Rudolf Hoernle, J. R. A. S. 1916, London p. p, 707~732.
- 15) 表2の如し。
- 16) 『法句譬喩経』大正4, pp. 603~604.
- 17) 『今昔物語集』一天竺篇卷三, 25。「后, 背王勅詣仏所語」。
- 18) ここには、「Māgandīya が Sāmāvati の vīnā の中に毒蛇を入れて、Sāmāvati が Udena 王を殺そうと企んでいるとみせかけた。それで王は怒り、毒矢を射ようとしたが、Sāmāvati の慈心三昧によって、矢を射ることが出来なかった」とある。
- 19) Udāna, VII, 10, p. 79. この焼死の記事は, Dh. p. A に, 一字一句等しく引用されている。
- 20) 表3参照。
- 21) 中村元著「慈悲」pp. 52~60 参照。

(東方学院講師)

— NEW PUBLICATION —

SADDHARMAPUNḌARĪKA-SŪTRA

Central Asian Manuscripts

Romanized Text

Edited with an Introduction, Tables and Indices

by HIROFUMI TODA

Tokushima Kyoiku Shuppan Center, 1981



戸田宏文著 「中央アジア出土・梵文法華経」  
徳島教育出版センター (徳島市佐古三番町8-14)  
昭和56年12月28日刊・定価20,000円 (59+365頁)